

〔資料〕

「マンダラ塗り絵」に関する心理臨床学的研究（2）

黒木 賢一

I はじめに

「マンダラ塗り絵」に関する心理臨床的研究（1）は2013年に『大阪経大論集』に研究ノートとして発表した。その内容は9枚の半構造化図形を用いて行った研究である。9枚の半構造化図形とは、図形①の円のみ、図形②の2分割、図形③の4分割、図形④の8分割、図形⑤の12分割の図において、数字のシンボリズムと関係していることが分かった。また円の中に線が一本ずつ付け加えられることにより、空間分割が起こり新たな刺激を与える。この過程は人体の細胞分裂を想起させ、新たなイメージを喚起させる。また、図形⑥は円と四角形、図形⑦は円と対角線上に線をいれた四角形、図形⑧は動きのある円図形、図形⑨は円の中に4つの円を描いた図形である。これらの図形に関しても、シンボリズムと深く関わっていることがこの研究の結果で明らかになった。その内容は、①図形のシンボルによるイメージが喚起させられること、②気分・感情表出によって自己洞察がおこること、③過去の記憶が出てくることであった。

本稿では、基本的な半構造化図形を図1の6図形にしぼり、対象者のイメージの流れを読みとることで、自己理解がどのようにされているのかを解明することが目的である。20名の対象者のうち、4名のマンダラアートを通して検証をおこなう。

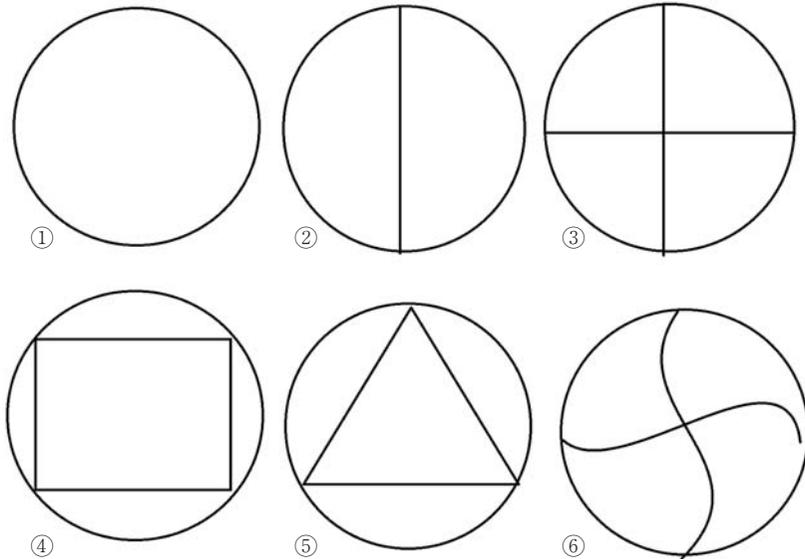
II 方法

- (1) 対象者：大学生2・3回生20名（男性7名 女性13名）で実施。
- (2) 実施の場所と条件：週1回の「芸術療法実習」の授業内で5週にわたって実施。場所は学内の教室。季節は7月。
- (3) 実施の流れ

1) 彩色

- ①図形と絵具の配布：全員に「マンダラ塗り絵」の図1の6種類の用紙（A4用紙に印刷）を順次配布し、24色の色鉛筆と24色のクーピーを1人1セットずつ配布。
- ②彩色についての条件と時間：「このマンダラに自由に色を塗ってください。線や形を付け加えても構いません。しかし、この円からはみ出さないようにしてください」という教示をし、所要時間は、彩色と振り返り用紙への自由記述と簡単な質問を毎回1時間半のプログラムで個人差を考慮しながら行った。

(図1) 6種類の図形



2) 振り返り用紙の配布

「マンドラ描画」実施後に自由記述の振り返り用紙を配布。その際、「描いたものを見て、気づいたり、感じたこと、また自分の「過去と未来」と関連についても記述してください」と教示。描き終えるには、個人差があるがゆえ、一枚描き終えると図1の番号順に用紙を手渡した。

Ⅲ 結 果

対象者20名の作品のうち、4名(女性3名、男性1名)の作品とそれに関するコメントは以下の内容である。コメントの記述に関しては、本人の情感を残すようにし、理解しにくい点のみを筆者が手を加えた。また「ですます調」も本人の文体に合わせた。

事例：A(女性)



絵1

丸(図①)を見た瞬間に地球が浮かびました。日本から描き始めたのでやはり日本人だと思います。その次にアジアを描いて、オーストラリア、ニュージーランド、最後にアメリカを描きました。日本に関係がある国、私が実際に行った国、関係が無い国の順に描きました。色を塗っているときに感じたことは、宇宙から見た地球の美しさを考えていました。あとは、雲の感じが上手く塗れなくて困りました。



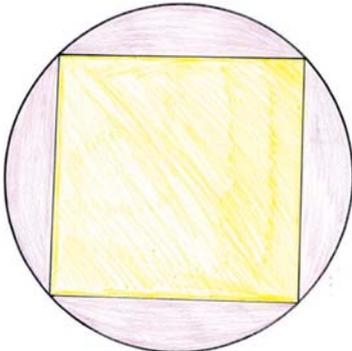
絵 2

真ん中に線があることで、二面性が浮かんできました。1番に出てきたのが、天国と地獄だったのですが、絵に出来ないという結論に至り、昼の顔と夜の顔の二面性を描きました。昼はにぎやかで、夜は静かというイメージでした。



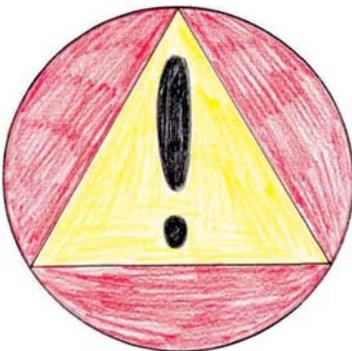
絵 3

これまでの絵が地球、朝と夜だったので、似ているような感じの四季が思いつきました。春はお花見、夏は海、花火にスイカにかき氷、秋はお月見、冬は雪遊びやクリスマスを思いつきました。



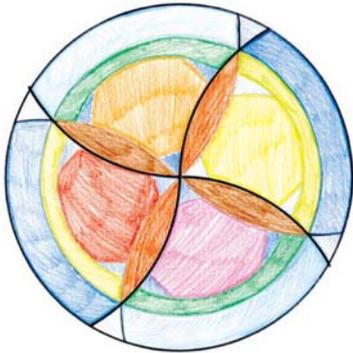
絵 4

図形を見せられたときに、朝顔を思いつきました。形から連想したけれど、まだ自分は寝起きだということもあり、眠くて朝に開く花を連想したのだと思います。また、色は朝顔に見えたのでそれらしく塗りました。



絵 5

注意マーク？警告マーク？とりあえず危険を知らせるマークを描きました。昨日、戦争によって苦しめられた人の話をTVで見たので、きっとそれが、影響したのだと思いました。



絵 6

適当にコンパスを使ってみたら、チョウチョのように見えたので、そのままチョウチョを描きました。でも、正確に測ることなしに少しずつ動かして全体が少しずつ違う形にしました。また色も違うようにしました。昨日のTVでのSMAPの「世界に一つだけの花」を思い出したからだと思います。みんなが違って、みんな良いということがテーマだと思います。

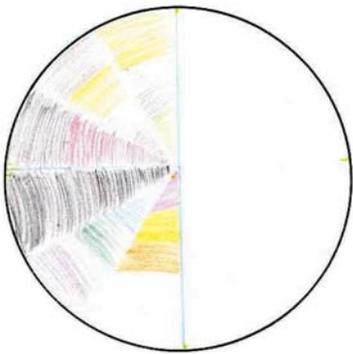
(①から⑥のまとめ)

地球、昼夜、四季、花、生き物と大地に関連があり、どこかしっかりと統一性があるように思います。1つだけ自然との関係が無いように思える⑤の警告マークは戦争を意味していて、自然や生き物なんか死ぬと言うことにつながるの、やはりどこか関連があるのかなと思います。

(過去と未来)

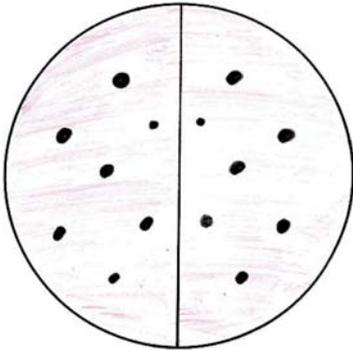
朝顔やチョウチョは自分で昔育てたことがあるので、過去に関連していると思います。①②③は過去も未来もないようなものだと思います。警告マークは過去の戦争を表すと同時に、最近安部総理が防衛の条例を決めたり、戦争に発展しそうな感じが、それを無意識に警告マークにしていたのかもしれない。

事例：B（女性）



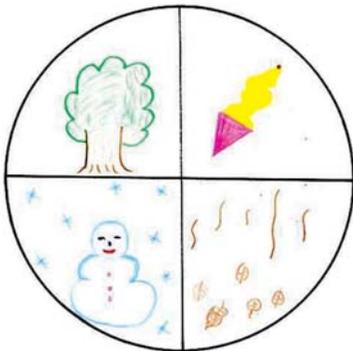
絵 7

5分ほど黙って、何を描こうと長い時間考えて、今の作品を作った。丸を半分に分けて、左側は六つの部分があり、右側の部分は真白である。なぜなら、人生は時計のように、6時から子どもの時代、次は小中学校、高校、大学、仕事、今は日本に留学中を表している。過去から今まで様々なことが私の人生にあった。しかし、未来のことは全く分からないから、半分は白くなった。また、特に言えば、小学校が一番幸せな時代だったので、色は濃くて暖かい感じで表した。中学校は暗くなって、高校は色々なことがあり、あまりよくなかったので、真黒にした。就職した時に、最初は熱心に働き、困ることがあったので、青色で塗り、新しいことは緑色にした。最後、仕事を辞める時には赤い色で深い感情を表している。現在は日本に留学しており、色と同じように、様々な気持ちや体験を表している。



絵 8

2番目の作品は、深い意味はない。単に虫の絵である。虫を描くときに虫の形をはっきり覚えていなかったのので、似ているかどうかはわからない。



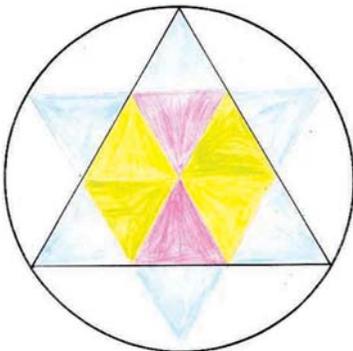
絵 9

円が四分割されている図を見て、自然に四季，春夏秋冬を思い出した。緑の木は春，アイスクリームは夏，風と落ちている葉は秋，雪だるまは寒い冬を表している。もし，自分の絵が上手だったら，もっときれいな絵ができると思う。



絵 10

今までで一番アイデアが出たが，上手に塗れなかった。また，塗り絵が簡単ではないことに気づいた。クーピーを使ったので色鉛筆と違って，外に少しはみ出した。この作品は視覚的で，外から中に向かって青色が徐々に色を濃ゆして，黄色はそのままにした。そのように塗ると，丸と四角形以外に，他の形から浮かび上がってきた。それは予想外であった。



絵 11

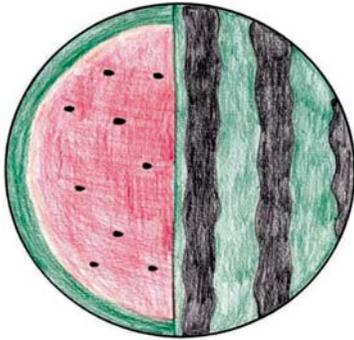
最後の図は丸の中に三角形がある図形で，描く前は「今度はもっと面白いものを作ろう」と思ってアイデアを出した。三角形を基本に，逆三角形を作って，そこで，いくつかの小さな三角形を描いた。まず，外の三角形を青色で描いた。何も考えずに，いつも青色を先に選んだ。それは，青色が一番好きな色である。六角形が残ったので，また線を引いて，六つの三角形を作った。次は二番目に好きなピンクを選んで描いた。青色とピンクの間の三角形を黄色で描いた。この作品は今までで一番自分にフィットするので満足している。

①～⑤のまとめ

1, 円だけの図形①から円の中に三角形がある図形⑤まで作成した。図形④と図形⑤は美しいデザインを考えて作った。自分の心理も変化した過程がある。単に描くことから何か図形を作るまでという過程があった。

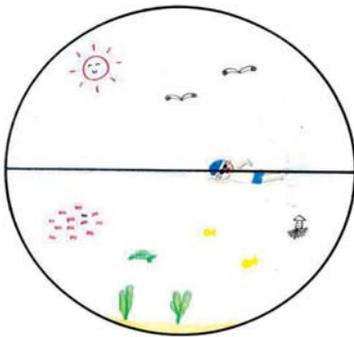
2, 先生が配った図形が人生と似ていると考えられる。それは最初の円だけの図は、人生の子どもの時代と同じ、規則やルールも考えなくて、自由自在のままで過ごした。時間が流れ、徐々に大きくなって、少しずつルールや色々な考えるべきことが増えて、自由になることが不可能になり、人生は必ず規則や規律を守らなければならない。

事例：C（女性）



絵12

何もない丸（図形①）をみたときに、まず思いついたのが、トマトやりんごといった食べ物で、どれもヘタが出てしまうなどと思い、スイカに決めた。夏だし食べたかった。ただ単に、スイカの表面だけにするのはつまらなかった。4分の1はカットして、中身が見えるようにした。頭に浮かんだのは食べ物ばかりで、食いしん坊だと思った。朝寝坊して少ししか朝食を食べていなかったからかもしれない。今の夏は暑くてスイカにハマっているので、スイカを描いた。



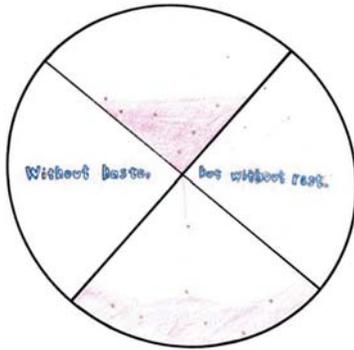
絵13

先ほどスイカを描いたことによって、頭の中は夏モードになっており、泳いでいるイメージが湧いてきた。プールにしようと思ったが、海で魚たちがいて、にぎやかにしたい気分だったので、色々付け加えた。

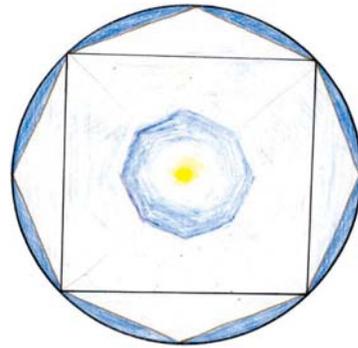
絵14

ピンクで塗った所は、砂時計をイメージしていてキラキラしているのが好きなので金色の星を散りばめてみた。私の人生がこの砂時計のようにキラキラしていたらいいなという思いも込めている。「without haste, but without rest.」はドイツの詩人、ゲーテの名言で、「急がず、だが休まず」という意味である。

絵14

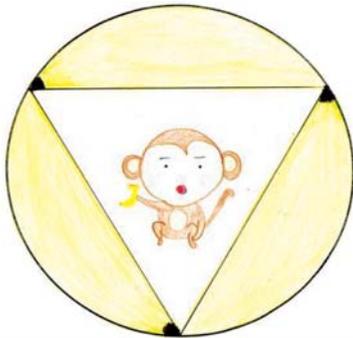


絵15



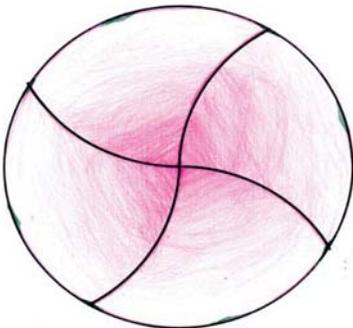
絵15

朝顔をイメージして塗った。少しゴージャスな朝顔。群青色と金色にハマっているのがよくわかる。少し夜空っぽくなったと思う。



絵16

バナナが見えたので、真ん中にサルを描こうと思った。ゴリラは難しくて描けなかった。私は斑点が出てきたバナナより少し緑っぽい若いバナナが好きだ。



絵17

バラのつぼみをイメージして塗った。やわらかい感じにしたかったのでグラデーションになるようにした。周りの緑色は がくを表現している。昨日、100円均一ショップでバラの造花を買おうとしていたのを塗ってから思い出したが、買ってはいない。

①～⑥のまとめ

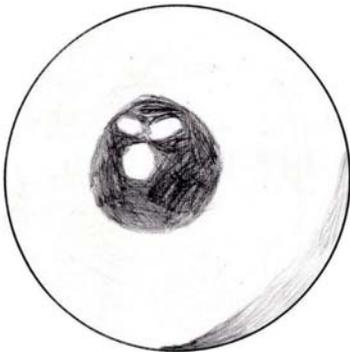
暑いし、スイカを食べたかったから①を塗り、その夏のイメージから引っ張られるように②を描いた。結果、全体的に夏っぽいイメージで出来上がったと思う。スイカ→水泳→砂時計→朝顔→バナナとサル→バラのつぼみ③④⑥は、私の好きな色で構成されている。

全体を通して子どもっぽい印象を受けた。

(過去と未来)

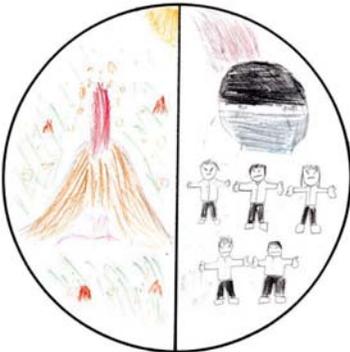
②で描いている赤い魚と黒い魚は小学校で習った「スイミー」になっている。これは意識した。③は砂時計で、星を散りばめているのはキラキラした人生にしたいという未来の希望になっている。⑥のバラのつぼみは昨日買ったかったバラの造花が無意識に出てきていると思う。

事例：D（男性）



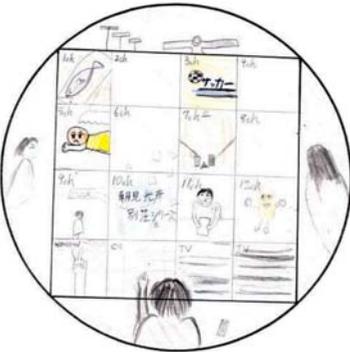
絵18

最初に円を見た時は真っ暗に少し陰った明るい月が思い浮かびました。それを描いているうちに、いやこれは怯えた目だと思いました。黒い丸が円の中を動き回ります。そのようなことをしてどんどん気分が沈むものですから、今度は目が怯えた人の顔に見えて行きました。自分勝手な思いですが、次々と描きたいものが変わるので面白かったです。



絵19

二分割でしたので何かと対比させたものを描きたいと思いました。最初は笑顔と暴力と言う二面性を描いていて、笑顔と切り離された人を描きながら虚しくなったので、そこから得たアイデアを元にこのような絵になったが、何を描こうとしたのか思い出せません。原発事故を隠そうとする人たちと、火山噴火に何のつながりが……。頭が熱くなっていたので苛立ちを押さえ込んでしまったのだろう。



絵20

最初、麻雀卓だと思い牌を描いていたら、途中で描ききれないと思い、他のこをと考えていたら四角がTVに見えたので、TVから離れられない人のイメージを描きました。映像も描こうと思い、最初は楽しく描いていたのですが、終わりかけに頭の左側がとても熱くなり大変でした。画力が欲しいと思いつつ、最初は、何の形かと思いましたが、意外とたくさんの形が思いつきました。自分もTVっ子なので自己非難しているみたいでイヤな気分になりました。

絵21



絵21

切断された魚の頭、矢印、ホームベース、ヒーローと続いてイメージが浮かびました。一番個人的に合ったのがゲームのワンシーン。しかし、なかなか他の案がでませんでした。ふと、最初の魚でいいと思い描きました。カラフルにしようと思いましたが。顔はこれぐらい変でいいかと。怯えています。円から何かで覗いているような。一番気を抜いて描けたと思う。

（①から⑤のまとめ）

最初に流れを見て思ったのが、どれも何かに怯えているように感じるということです。あとは全部嫌な絵です。①は怖いし、②は良いことじゃない、④そうなりたくないって思っているTV中毒の自分、⑤は怯えているし、本当にどの絵も楽しくない。なぜ？どれも具象的な気がする。抽象的に描きたかった。それに全部地味。笑顔無し。ボブ笑っている。

（未来について）

未来を少し知っているなら、自分は怯えているんだろう。それが絵に出てる。嫌なことが少し続くからでしょう。本当に未来を知っているといいな。絵を描くのが楽しくなりますよ。

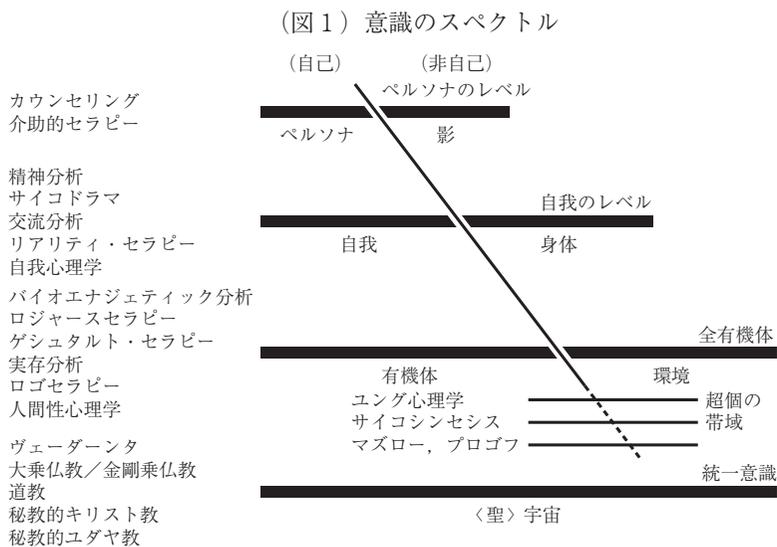
IV 考 察

20人中、①図形から⑤図形或いは⑥図形まで描いる特徴のある4名を抽出した。本稿では、イメージの動きかたを通して、シンボリズムとケン・ウィルバーの「意識のスペクトル論」に照らし合わせて考察を行う。

理論家のウィルバーは、トランスパーソナル心理学の発展に大きな影響を与えた一人である。彼は「人間のパーソナリティが一つの意識の多層的な顕現、もしくは表現である」として意識のモデルを、物理学において電磁場が構造的に多層帯域をもつというモデルを用いて「意識のスペクトル論」を提唱した。図2は四つの主要なレベルに分け意識の階層性を説明したものだ。

まず一番目の（聖）宇宙と書かれた統一意識レベルの線は、宇宙、無限、永遠と呼ばれる一の世界であり、いかなる二元対立や分裂もなく、世界そのものの状態、自己と非自己の区別もなく、すなわち統一された意識状態を示している。これを分かりやすく説明すると、妊娠中の母胎（胎内宇宙）の中で育っている胎児は、母子一体であり、「二にして一」の状態であるといえる。次に産道（超個的帯域）を通過し、母親の胎内から誕生する乳児は、二番目の全有機体レベルでは、有機体（心身統合体）と環境（自然）の二元に分化することで、時間と空間の中に存在し、身体の皮膚の内と外、自分と他者との境界線が引かれる。本稿では全有機体レベルについて「実存レベル」として記述している。また成長す

るにつれて個人的な意志が発達していく。三番目の「自我レベル」では自我と身体の二元に分離することで、「私は身体をもっている」という心身を分けて考えるようになる。そして、思考する自分が自分であるような錯覚に陥り、自らのアイデンティティを狭めていく。四番目の「ペルソナレベル」では、受け入れられる側面をペルソナ（仮面）として、否定したい自分の側面を影の領域に抑圧する。このようにして自分のアイデンティティを自我の一部に狭めることにより、自分と思ひこむようになる。このように宇宙意志の高次のアイデンティティからいくつかのレベルや帯域をへて、自意識に集約される狭いアイデンティティ感覚や意識の在りように至るといふ。



斜めの線は、自己（自分或いは自我，内）と非自己（自分以外，外）を表している。たとえば仮面と同一化している個人の場合、抑圧した自分の影の側面、自分の身体、環境としての自然が自分とは関係がないように感じられる。それらは潜在的に驚異をあたえるものとして映り、皮膚の内を自己、皮膚の外を非自己として分けているのである。ユング心理学のこのころの構造として非自己が無意識の領域に相当し、ペルソナレベルと自我レベルが個人的無意識の領域、全有機体レベルと統一意識レベルは集合的無意識の領域に相当すると考えられる。

そして、自分のアイデンティティを自我の一部に狭め、自分と思ひ込んだペルソナの部分をユングの概念を使うならば「自我」と考えればよい。私たちの発達は自我を獲得することで、自分というアイデンティティの確立を行ってきた。統一意識レベルからペルソナレベルへ、図で示せば下から上へと、自我の発達は自らのペルソナ（仮面）を作ることで完成する。そして、ウィルバーは各レベルでの人格の発達の過程で、自己と非自己のつながりが切れて、ペルソナを自分と思ひ込んだとことに「このころの病」が起こるのであると言った。このペルソナレベルで作られた世界が私たちの住んでいる俗世のリアリティなの

である。ウィルバーは「こころの病」を回復させるには、表層から深層へ、図で示せば上から下へ、各レベルで排除した非自己と認識している影、身体、環境と「つながる」ことで、本来の自己が回復される。この本来の自己を回復させるには究極的なリアリティを知らねばならない。また、左側に記載されたセラピー名は各階層ごとに有効な治療法を整理したこともウィルバーの貢献の一つである。

諸セラピーについて、スペクトルの異なったレベルでそれぞれの特徴があり、そのレベルでの問題を取り扱う様々な技法や学派があることを示している。

ペルソナのレベルにおいてはカウンセリングと介助的セラピーが分類されているが、行動療法、認知療法、認知行動療法はこのレベルに入る。ものの見方や認知の仕方を現実レベルで変え、刺激と反応による行動変容を促すことにより、自らの認知を変容を促す。自我レベルにおいては、精神分析が無意識にアプローチすることで自我の強化をはかり、防衛機能を理解し、社会に適応する健全な自己イメージに戻していく。全有機体レベルでは、実存的に再統合を目指している人間性心理学の領域がある。その先には「トランスパーソナル自己」と呼ばれる超個の帯域、言い換えれば統一意識や至高のアイデンティティを目指す領域があり、ユング心理学やサイコシンセシスなどはこのレベルに関わっている。そして宗教的な領域である「一」なる世界が広がっている。このようにウィルバーの意識のスペクトル論はセラピストにとってクライアントの訴えや問題を理解するには焦点を合わせやすい地図である。それは、人間の意識の発達過程における問題によって有効な理論や技法を示したからだ。

今回の4名は、半構造化マンダラ塗り絵を作成するプロセスで、無意識からふと浮かび上がってくるイメージを通して意識状態が絶えず変化しループ（循環）している。そして、ペルソナレベル、自我レベル、実存レベル（＝全有機体レベル）、統一意識レベルを絶えずワープ（移動）しながら、各自の無意識の物語が創られ、様々な気づきが起こってくると思われる。

事例A（女性）

今回の塗り絵シリーズでは、「地球、昼間、四季、花、生き物と大地に関係があったりどこかしっかりと統一性があるように思います」と述べている。この内容は、自然に関することだと考えるとウィルバーの「意識のスペクトルの図」（以下スペクトル図）に当てはめると実存レベルでの領域での「環境」にあたる。また、円のもつシンボリックな意味として、天空、地球、宇宙、星、虹といった大自然につながる事象は、統一意識レベルであり、また集合的無意識を刺激していると思われる（黒木、2013）。図2では、二分図形では、二元性、正反対、対立、相違などのシンボリズム（Cooper, 1978, Chetwynd, 1982）の意味があり、東洋では「陰陽」という二元論とつながる。Aさんは天国と地獄から、自分の昼の顔と夜の顔という、スペクトル図にたとえれば、自分の内面に関わるペルソナと影の領域であり、実存レベルからペルソナレベルへとワープし、絵3の四分図では多くの

人たちと同様に四季をイメージして描いており実存レベルへと再びワープしている。

絵4では朝顔をイメージしたという。線によって分割される図柄とは異なり、円と四角形という図柄に変化するゆえに、イメージの浮かび方が異なるように思われる。また寝起きという意識状態から、夏、朝に咲く花をイメージしたという。絵5では、昨日の戦争のテレビ番組の記憶が呼び起こされ三角形の注意喚起のマークを思い出した。この注意マークは本人にとっては政治における現政権への不安が述べられている。図6は何らかの動きを意識した図形である。コンパスを用いているうちに「蝶」のイメージが浮かび上がり、昨日のSMAPの曲を思い出したという。蝶のシンボリックな意味は「魂」の領域を示しており、心の「変容」を表している。このことは本人は全く意識されていないが、「ちょっとずつ動かして、全部がちょっとずつ違うものになりました」という気づきの奥に内的変容が自律的に行われているのかもしれない。

事例B（女性）

絵7では、Bさんは円の図①を5分ぐらい眺めたという。眺めているうちに「人生は時計のようだ」という実存的なレベルから過去の記憶、幼少時、学童期、思春期、青年期とまた現在日本に留学している自分を思い出し、現在までの人生をさまざまな色彩で表現している。絵8は二分割図形であるがそのことは明記されていない。しかし虫の数と位置が対象的になっている点が興味深い。四分割の図9は多くの人が描くように春夏秋冬の四季をシンボリックなイメージで描いている。絵10に関して、円のシンボリックな意味はすでに絵1で説明した。四角形のシンボリックな意味、四方向と四大を持つ大地、物質界を表し安定を示しており、また大地の持つ女性原理が含まれる（Ad de Vries, 1974, Chetwynd, 1982,）。絵10は幾何学模様が現れ、大地と天空が一つになり、融合しているように思われる。また、この図はトランスパーソナル的な統一意識レベルへと向かう異空間の入り口のようにも見える。

絵11は円の中に三角形を描いた図である。三角形のシンボリックな意味は火、山、垂直性、神、無限、ピラミッドなど男性的なものを表し、正三角形の場合は、潜在的な力を表す。また逆三角形は水、月、冥界の力など女性的なものを表している。絵11のように三角形と逆三角形の図は「ダビデの星」と呼ばれ、神聖、統一、三位一体、人と水、精神と物質、男と女などの対立物の結合と見なすと言われている（Ad de Vries, 1974）。またBさんは六角形からより細分化した三角形を作り、この絵が「一番満足している」と語っている。この満足感は内的な統合を無意識で感じるがゆえのものなのだろうか。

事例C（女性）

絵12では①図を見たとき、円から身近な野菜や果物を連想したという。Cさんは毎日暑くて、今年はスイカにはまっているので4分の1カットしたスイカを描いたという。ここで重要なことは、Cさんが無意識で平面図の円を球体として捉えたことである。円を描いた用紙を用いる「マンダラ描画法」では、平面の円であるが「球体の円」として気づく人

たちがいる。ここに円の持つ不思議な表現力、イメージ力、治癒力が潜んでいる。絵13は、スイカから夏モードになり、本人は空と海という二元性で絵を描がいているが、そのことには言及していない。絵14は四分割図形を少しずらして砂時計をイメージして描いている。砂時計という時間と金色の星をちりばめ、自分の人生がこの砂時計のようにキラキラと輝くことをイメージし、ゲーテの「急がず、休まず」という、「時」に関する実存的レベルについて語っている。絵15について朝顔をイメージした点では、事例Aと同じであるがデザインと色合いは個人によって随分と異なっている。この絵で注目したいのは、中心に描かれた八角形である。四角を円に変えるには回転させればよく、円と四角形の間段階の八角形は大地（＝女性原理、物質、理性）と永遠（＝完全、霊）をつなぐと言われている（Ad de Vries, 1974）。その意味では、Cさんの無意識は統一意識レベルについて表現しているといえる。

絵16の図形⑤を見たときにバナナをイメージし、バナナから猿という連想をしている。この連想は多くの人がすると思われる。猿には英語ではapeとmonkeyの語彙があり、模倣、欲望、官能、動物性的性質、追従などの様々なシンボリックな意味がある。心理臨床での場面ならば、クライアントにシンボリックな意味を説明し、「何か気づくことがあれば」と連想してもらい、対話していくという方法を用いる。絵17は、昨日ばらの造花を買おうとした昨日の出来事から連想している。図形⑥の狙いは動きをテーマにしていることはすでに述べた。絵17では「バラのつぼみ（蕾）をイメージして」いる。蕾のシンボリックな意味は、潜在的或いは未発達な力、未成熟などの意味がある。この蕾の絵は、今後エネルギーに動いてきそうな予感がする。それは本人が語っている「子どもっぽい印象」からの脱皮なのかもしれない。

事例D（男性）

Dは①図を見たとき、「少し陰った明るい月」を想像したという。月→怯えた目→黒い丸が動き出し→怯えた人の顔を変化すると共に気分の落ち込みが起こったという絵が18である。イメージが受動的に動きだし、気持ちが変化していく。

絵19は二分割なので「笑顔と暴力」という二面性から「人の笑顔を切り離されてた指を描いていて、むなしくなり、……何を描こうとしていたのか思い出せない」という。イメージが急速に相反することで自律的に動いたために、Dさんの自我が無意識からのイメージに圧倒され、意識が変性したと思われる。そして、「原発事故を隠そうとする人たちと、火山噴火のつながりが……」分からなくなり混乱が生じたのであろう。それゆえ、身体化症状として、頭があつくなり、自らの苛立ちを詰め込んでいたのかも述べている。その意味では、各レベル（自我、実存、超個）を無意識的にワープしループした可能性が高い。

絵20では、麻雀卓からテレビ、テレビから離れられない人とイメージが動いていく。そして、書き始めは楽しかったが、後半になると「頭の左側がとても熱くなり大変だった」、そして「自分もTVっ子なので自己非難しているみたいで、イヤな気分でした」という。ここでも身体化が生じ、自我レベルの身体からバルソナレベルでの影へとワープしている。

Dさんの特徴は、イメージが自律的に動きやすい傾向からすると本人のバウンダリー（自我境界）にテーマがあるのかも知れない。

絵21では切断された魚の頭→矢印→ホームベース→ヒーロー→ゲームのワンシーンと自律的にイメージが変化している。そして魚の頭にして描き始め、カラフルにしたいという思いと、何故か「怯えている」という。また外円から何かで覗いているのかと、様々なイメージが動いている。

V お わ り に

本稿では、半構造化塗り絵（①～⑤或いは⑥）の流れをシンボルの意味とウィルバーの「意識のスペクトル」の図を用いて、4名が描いた絵とコメントを参考にしながら、無意識から浮かび上がってくるイメージを捉え、スペクトル図の階層に照らし合わせ作業をおこなった。各自が無意識に描いている図の中で、イメージが自律的に働いている。マンダラ半構造化塗り絵を行うことで、意識の上に上がってこなくても、無意識世界では様々な変容を起こしていると思われる。事例4では自我と無意識との折衝が起こる様子が見られた。このような折衝が行われると身体化が生じてくる。その意味でも心理臨床の技法の一つとして「マンダラ半構造化塗り絵」は有効であると考ええる。

文 献

Chetwynd, Tom (1982): A Dictionary of Symbols. Granada Publishing.

黒木賢一・小田純也 (2013): 「マンダラ塗り絵」に関する心理学的研究 (1) 『大阪経大論集』
Vol. 63, No 6. pp. 43-56

Vries, Ad de (1974): Dictionary of Symbols Imagery North-Holland Publishing Company. 山下主
一郎 (主幹) など (訳) (1984): イメージ・シンボル事典. 大修館書店

Wilber, Ken (1979): No Boundary ウィルバー, K. (吉福伸逸訳) (1986): 無境界. 平河出版社.